東松山市及び周辺地域の古墳時代について
～代表的な古墳の紹介と人々のくらし～
20 期歴史・郷土学部　課題研究 B 班

（後列）　柿﨑順子、布施公也、飯平孝、大井康史、◎岡田睦夫、〇阿曽田洋子
（前列）　◇田宮祥子、笛木幸代、井上則子、佐藤春江、柴田春海
（◎リーダー、〇サブリーダー、◇会計）

1 はじめに

埼玉県の古墳の数は 4,693 基が確認されている。中でも、行田市にある埼玉古墳群は全国的に有名であるが、東松山市にも約 600 基の古墳があるといわれており、県内有数の古墳のある市ともいえる。また、平成 19 年から始まった埼玉県埋蔵文化財調査事業団による反町遺跡の発掘調査により、玉作工房跡や約 300 軒の住宅跡が発見された。この調査により、古墳時代中期には県内で最大規模の集落が存在していたことが明らかになった。

第 20 期歴史・郷土学部課題研究 B 班（以下、B 班と言う。）は、古墳の初心者として現地の古墳調査と、メンバー各自の大胆な想像や感想等を加えて東松山市及び周辺の古墳について学ぶこととした。

2 主な活動

2 月～3 月	課題研究テーマ・主なスケジュール検討
4 月～7 月	4/5 保渡田古墳群、4/16 埼玉古墳群、5/1 東耕地 3 号墳・雷電山古墳・甲山古墳、5/17 若宮八幡古墳他、6/1 おくま山古墳・根岸稲荷神社古墳他の現地調査
7 月～8 月	調査した古墳について検討
8 月～9 月	報告書の検討
9 月～11 月	報告書の作成・提出

3 課題研究テーマ

きらめき市民大学の講義や古墳に関する文献等によれば、古墳は水運や灌漑に利用された河川の流域や河岸段丘に多く分布しており、河川は古墳時代の社会を支える重要な基盤であることが分かった。そこで、以下の 2 点を課題研究のテーマとした。

Ⅰ　都幾川と市野川流域、及び比企丘陵(東松山台地を含む)に分布する古墳群を分類するとともに各分類の古墳群の中から代表的な古墳の現地調査を行う。

Ⅱ　古墳の築造には土砂を運搬し盛り上げるため膨大な労働力を要するが、古墳築造の労働力となった人間がどのようにくらしていたのか調査を行う。

但し、このテーマは古墳の初心者として大変難しいテーマであるため、東松山市内に範囲を限定しないで周辺地域を含めた古墳時代の人々のくらし全般について文献等で調べることとした。

4 古墳時代の基礎知識

古墳チームのメンバー11 名の古墳知識に差があったため、まず、古墳に関わる基礎知識を共有することからはじめた。

(1) 古墳形状

古墳時代は 3 世紀中頃から 7 世紀頃までの約 350 年間を指し、この時期に築かれた墳丘を古墳と呼ぶ。日本には約 160,000 基の古墳があるといわれている。古墳は形状から「前方後円墳」(「帆立貝式古墳」は前方後円墳の変形)、「前方後方墳」、「円墳」、「方墳」等に分類される(表－1)。なお、日本の古墳の 9 割が円墳である。6 世紀に全国的に広がり、群集墳として数百基が密集して作られることもあった。

(2) 古墳形状等の推移

古墳時代は前期・中期・後期（7 世紀は一般的には「飛鳥時代」と言われているが「古墳時代終末期」と呼ばれることもある。）で、築造された形状・石室・副葬品に違いがある（表－2 を参照）

表-1　代表的な古墳形状

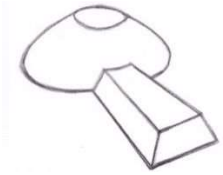
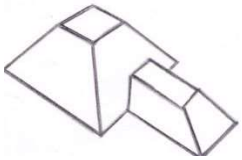
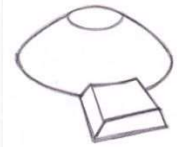
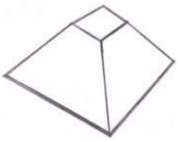
前方後円墳 古墳時代を代表する墳形。巨大古墳が多い。 	**前方後方墳** 前方後円墳の後円部を方形にしたもの。 	**帆立貝式古墳** 前方後円墳のうち、前方部分を著しく短くしたもの。 
円墳 円形の古墳。古墳時代全体を通じて日本全国に分布する。5 世紀後半からは主に小型円墳の群集墳が形成される。 	**方墳** 墳丘の立体的な形状がピラミッドのような四角錐又は四角錐台の古墳。 	**八角形墳** 古墳時代終末期(7 世紀半ば)に作られた正八角形古墳。京都の御廟野古墳（現天智天皇陵）が有名。

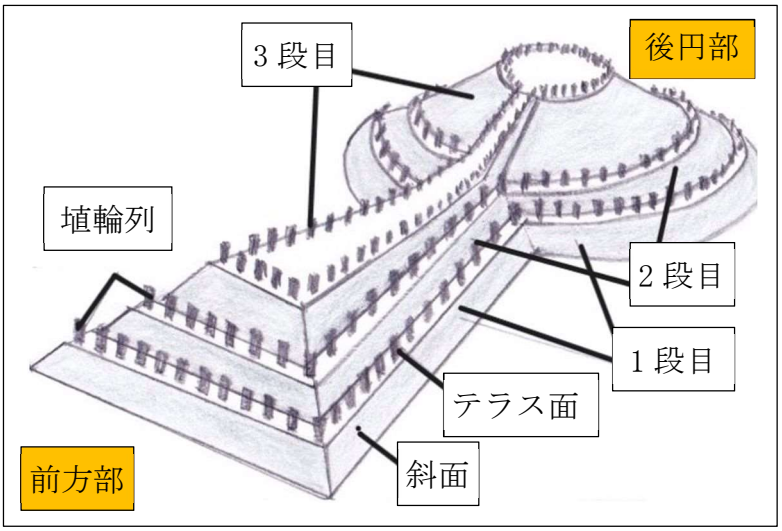
表-2　古墳形状等の推移

期	前期	中期	後期
世紀	3 世紀後半～4 世紀末	4 世紀後半～5 世紀末	5 世紀末～7 世紀
形態	円墳、方墳が主流。近畿中央部に前方後円墳。東海地方をルーツとする前方後方墳が東日本一帯に広がる。	前方後円墳(巨大化、周囲に濠や陪塚(ばいづか)）が全国に広まる。	古墳の造営の衰退。7 世紀には前方後円墳は造られなくなり方墳・円墳等を築造。
内部構造	竪穴式石室・粘土槨(ねんどかく)・木棺・石棺	竪穴式石室・木棺・石棺	横穴式石室が全国に普及
副葬品	銅鏡・玉・碧玉(へきぎょく)腕飾(うでかざ)り・鉄製武器・農工具など呪術的なもの。	刀剣・甲冑など鉄製の武器・武具・馬具・冠・金銅製装身具など軍事的なもの。	武具・馬具のほか飲食用の土器などの日常生活用具が中心。
埴輪	円筒埴輪	形象埴輪	円筒埴輪・形象埴輪

(3)前方後円墳

前方後円墳は古墳時代を代表する古墳である。固数では全古墳の僅か3％を占めるだけだが考古学的には前方後円墳の出現と終わりの期間が古墳時代である。それは、この古墳が単なる墓に留まらず政治と社会を維持するために大切な役割を果たしたからである。

図-1　前方後円墳説明図



文献等によれば、前方後円墳は、ヤマト王権が倭の統一政権を確立してゆく中で、各地の豪族（首長）に造営を許可した古墳形式とのことである。各地の首長はヤマト王権の権威を認めヤマト王権連合に参画することで、前方後円墳の造営と鉄素材等の供給を得たといわれている。大阪府堺市の大仙陵古墳を最大規模として、豪族（首長）の権力の大きさに応じた規模の相似形の前方後円墳を築造したといわれている。

5 築造当時の古墳見学

我々が日頃目にする古墳は樹木に覆われた小高い山、畑の中に不自然にある小山という印象しかないが、古墳時代の人が非生産的とも言える巨大墳墓の造営にエネルギーを注ぎ込んだのを実感するとともに、古墳時代の人が見たであろう築造時の古墳の姿を見るため、当時の古墳を復元した群馬県高崎市の「保渡田（ほどた）古墳群」と埼玉県を代表する大古墳群である行田市の「埼玉（さきたま）古墳群」の現地調査を行った。

(1)保渡田古墳群

①概要

保渡田古墳群は関越道前橋 IC から車で 15 分程の高崎市内にあり、榛名山東南麓の井野川流域にある 3 基の前方後円墳の総称である。5 世紀後半から 6 世紀初期にかけて二子山古墳、八幡塚古墳、薬師塚古墳の順で築かれた。

また、二子山古墳と八幡塚古墳は二重の周壕を含めて築造時の形状に復元されている。中でも、八幡塚古墳は葺石や約 6,000 体の埴輪が設置されており築造当時の姿を見ることができる貴重な古墳といえる。

表-3　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
二子山古墳	前方後円墳	墳丘長 108m、後円部径 74m・高さ 10m、前方部幅 71m・高さ 7m	5 世紀後期
八幡塚古墳	前方後円墳	墳丘長 102m、後円部径 56m・高さ 6m、前方部幅 53m・高さは不明	5 世紀後期
薬師塚古墳	前方後円墳	墳丘長 105m、高さ 6m	6 世紀初期

ア　二子山古墳

保渡田古墳群で最初に作られた二子山古墳は、南東 1ｋｍにある三ツ寺Ⅰ遺跡の豪族居館を拠点として榛名山麓の井野川流域を統治した豪族の墓で、山麓水源地帯を抑えて大規模な農業経営を行った人物が埋葬されていると考えられる。

写真-1　二子山古墳全景図

写真-2　墳頂付近

イ　八幡塚古墳

築造時の古墳が再現されており 6,000 体の円筒埴輪が置かれている。古墳は約 40 万個の葺石で覆われ、54 体の人物・器財埴輪が生前の王が行ったまつりごとを表現している。

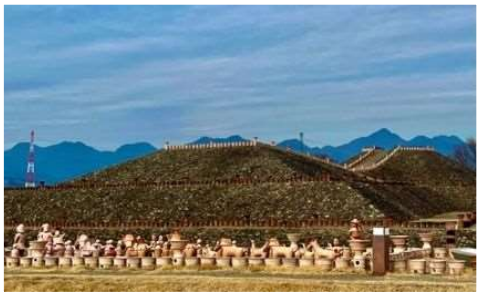


写真-3　八幡塚古墳全景図

写真-4　配置された復元埴輪

ウ　薬師塚古墳

墳丘部が南側から東側にかけてかなり削り取られている。埋葬施設は有力な首長にしか使用できない舟形石棺で墳頂上に保存されている。

写真-5　薬師塚古墳の入口

写真-6　墳頂に展示された石棺

②感想

保渡田古墳群は、約 30 年間という極めて短期間に 3 基の前方後円墳が近接して築造されたもので、東日本では他に例はない。広大な 2 重の周壕が巡らされ多数の埴輪を並べ、竪穴式の埋葬施設には大きな権力を持つ者だけに許可される舟形石棺が用いられた。前述した三ツ寺Ⅰ遺跡では、全国で初めて古墳時代の豪族の館が発見され当時の豪族の館の様子や暮らしが具体的に判明した。館の復元模型から当時の技術の高さと首長の権力の大きさが伺える。

(2)埼玉古墳群

①概要

行田市にある東西 500m 南北 800m という狭い範囲に大型古墳が密集する古墳群で、5 世紀後半から 7 世紀中頃にかけて築造された。前方後円墳 8 基、大型円墳 2 基、方墳 1 基並びに小円墳群で構成された全国屈指の古墳群である。埼玉古墳群は大宮台地の北端に位置し、築造時には古墳群に近い場所を流れていた利根川流域と荒川流域に挟まれた場所にあり、当時の物流や情報は東京湾からこれらの河川を通るルートからもたらせたと推察される。

表-4　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
丸墓山古墳	円墳	直径 105m、高さ 17.2m	6 世紀前期
将軍山古墳	前方後円墳	墳丘長 90.0m、後円部径 38.8m・高さ 8.4m前方部幅 63.6m・高さ 9.4m	6 世紀後期
稲荷山古墳	前方後円墳	墳丘長 120m、後円部径 62.6m・高さ 10.4m、前方部幅 82.4m・高さ 9.4m	5 世紀後期
二子山古墳	前方後円墳	墳丘長 120m、後円部径 67.0m・高さ 11.7m、全方部幅 83.2m・高さ 13.7m	6 世紀前期

ア　丸墓山古墳

日本最大級の円墳で、埼玉古墳群の中で一番高さのある古墳である。多くの前方後円墳が所在する中で、異色な存在と言える。戦国時代には石田三成による忍城攻めの際に陣を構えたといわれている。

写真-7　丸墓山古墳全景

写真-8　墳頂付近

イ　将軍山古墳

後円部に横穴式石室の内部が見学できる展示館が設置されている。

写真-9　将軍山古墳全景

写真-10　埋葬模型
（将軍山古墳展示館）

ウ　稲荷山古墳

金錯銘鉄剣（国宝）の他、帯金具、勾玉、鏡等が多く出土したことで有名である。

写真-11　稲荷山古墳全景

写真-12　稲荷山古墳前の案内版

エ　二子山古墳

前方後円墳では武蔵国最大級と言われている。造り出し部分が極めて大きいので、発掘調査が行われたなら、国宝級の物が出土するのではないかと推測される。

写真-13　二子山古墳全景

写真-14　二子山古墳近景

②感想

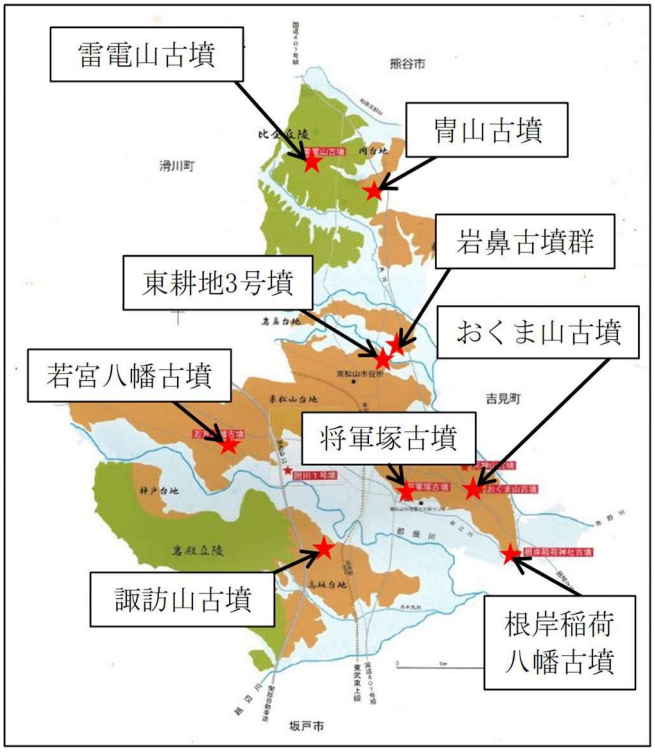
現地ガイドによると、この地域は荒川流域と利根川流域に挟まれた水運の要所であり、経済的な基盤として河川交通が重要視されていた。そこから、有力な首長が巨大な古墳群を築造した可能性が推測される。東松山市内にある雷電山古墳や野本将軍塚古墳は埼玉古墳群に関係しているとされており、市内の古墳群の重要性を再認識した。

6 東松山市及び周辺地域の古墳群

東松山市の地形は市内中央部から西部にかけて東松山台地、南部に高坂台地が広がり、北部は岩鼻台地・比企丘陵、南西部は岩殿丘陵の東端に当たる。また、都幾川・越辺川・市野川流域周辺は低地となっている。古墳時代のこれらの河川は荒川の支流として東京湾に通じる河川交通ルートがあったといわれている。

東松山市の古墳はこれら台地や丘陵にあり、河川流域と関係が深いと推察して、文献等を参考にして東松山市の河川流域の右岸・左岸で古墳群を分類した上で各分類の代表的な古墳の現地調査を行った。

図-2　実地調査した古墳



(1) 北部比企丘陵の古墳

和田吉野川と滑川の支流に挟まれた北部比企丘陵に存在する。雷電山山頂の雷電山古墳を中心に、放射状に張り出す谷によって画された尾根に 250 基の古墳が分布している。埼玉古墳群の周辺を一望できる位置にあり、これらの古墳群の東端に所在する甲山古墳と共に、埼玉古墳群とも関係する大首長の存在を示唆する重要な古墳といわれている。

表-5　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
雷電山古墳	帆立貝式古墳	全長 85m、後円部径 73m・高さ 7m、前方部幅 39m	5 世紀前期
甲山古墳	円墳	直径 90m、高さ 11.25m	6 世紀前期

①雷電山古墳

ア　概要

北部比企丘陵の標高 94mの尾根の上にある帆立貝式古墳で、後円部は 3 段築盛、最上段のみ盛土され、他の段は地山を削りだして造成された。出土した円筒埴輪は土師器の製作技法に近い技術で造られたもので、埼玉県最古である。

写真-15　雷電山古墳墳頂への階段

写真-16　出土した円筒埴輪
（埋蔵文化財センター）

イ　感想

川越カントリークラブの造成により周辺の地形が大きく変わったため、古墳数 250 基を超える大古墳群があったとは思えない。しかし、埼玉古墳群と同じ荒川水系に囲まれていることから、埼玉古墳群と何らかの関係があるのではないかと推測する。

②甲山（かぶとやま）古墳

ア　概要

北部比企丘陵の最東端（熊谷市冑山）にある 2 段築造の円墳で、円墳として県内 2 番目の規模である。この古墳は雷電山古墳を中心とした古墳群の東端に位置する巨大な円墳である。江戸時代に一度発掘されたが、その後、村に疫病が流行したため埋め戻し、その後は発掘を行っていない。

写真-17　甲山古墳東側の全景

写真-18　墳頂への階段

イ　感想

実寸より規模の非常に大きな円墳と感じた。墳頂からは北東方向に荒川や行田市が見渡せる位置にあり、同じ円墳である埼玉古墳群の丸墓山古墳と関係があるのではないかとの思いが強くなった。

(2)都幾川流域左岸の古墳

南側に都幾川、北側に市野川に挟まれた東松山台地上にある 12 の古墳群で、前方後円墳の野本将軍塚古墳と約 72 基の円墳がある。また、下唐子古墳群の中心に位置づけられる若宮八幡古墳の両袖型横穴式石室は規模の大きさや高度な石工技術を体感できる貴重な古墳である。

表-6　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
野本将軍塚古墳	前方後円墳	墳長 115m、後円部高さ 13m、前方部高さ 8m	4 世紀後期
若宮八幡古墳	円墳	直径 34m、高さ 4.5m	6 世紀後期

①野本将軍塚古墳

ア　概要

東松山台地先端部南壁に立地した前方後円墳で、埼玉県では 3 番目の規模である。発掘調査は行われていないが、2017 年に行われた東松山市教育委員会と早稲田大学考古学研究室の共同による非破壊調査によれば、埋葬施設は竪穴式（8m×3.5m）であり、木棺が安置され、上部は粘土で覆われていることや、古墳時代前期の古墳として特徴を備えていることが発表された。これは埼玉古墳群より約 100 年前に築造されたものであり、被葬者は強大な財力・技術力・武力を持った首長ではないかと考えられている。

写真-19　野本将軍塚古墳全景

写真-20　墳頂にある利仁神社

イ　感想

一見すると樹木の茂った森のようであり、巨大な前方後円墳とは分かりづらい。後円部の墳頂には利仁神社が、前方部には忠魂碑が建っている。古墳時代前期では埼玉県最大の前方後円墳であり、埼玉古墳群の築造に影響を与えたとの説もある。もし発掘調査が行われたなら貴重な発見があるのではないかと期待されている。

②若宮八幡古墳

ア　概要

東松山台地の西南、都幾川左岸の台地南縁に立地する円墳で下唐子古墳群の中心的な古墳である。平成 19 年に石室内を調査したところ、歪や亀裂が認められたため 4 年をかけて保存事業が行われた。この古墳の最大の見どころは、修復された両袖型横穴式石室であり、羨道、前室、玄室の複室構造となっている。石室は切（截）石切組積工法で造られ、両側の側壁が弧を描くように膨らむ胴張型で天井石の重みを分散させている。地元唐子地区を舞台とする児童文学者打木村治の代表作「天の園」で「恐怖の八幡穴」として小説の舞台になっている。

写真-21　若宮八幡古墳の石室

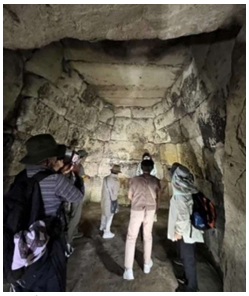


写真-22　石室内部

イ　感想

埋蔵文化財センターの厚意で石室内部を見学した。石室内部に立つと石室の内部空間が想像以上に広いと実感した。また、截石切組積（きりいしきりくみづみ）による胴張（アーチ）型で積み上げて天井石の重みを支える仕組みと整美さから、当時の土木技術がいかに高度であったかが分かる。石室に使用した砂質凝灰岩・凝灰岩は近くの産地である比企・岩殿丘陵から運ばれたのではないかと考えられる。

(3)都幾川流域右岸の古墳

高坂台地、都幾川右岸に位置する西本宿地区にある 7 つの小古墳群及び諏訪山古墳群で、高坂台地の東縁に前方後方墳や前方後円墳、台地中程に諏訪山 33 号古墳などの一群、台地北縁周辺に横穴式石室などを持つ円墳がそれぞれ築造されたと考えられる。この中から、前方後方墳である諏訪山 29 号古墳と前方後円墳である諏訪山(35 号)古墳の現地調査を行った。

表-7　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
諏訪山 29 号古墳	前方後方墳	墳長 53m、後方部幅 29m・高さ 3.6m、前方部高さ 1.6m	4 世紀前期
諏訪山(35 号)古墳	前方後円墳	墳長 68m、後円部径 40m・高さ 9m、前方部幅 30m・高さ４m	4 世紀後期（5 世紀後期～6 世紀前期の説もある）

①諏訪山 29 号古墳

ア　概要

高坂台地の北縁に位置する古墳である。但し墳長は約 25m という説もある。出土品には畿内系、東海南部系、近畿系等外来系土器がある。

写真-23　諏訪山 29 号古墳への小径

写真-24　諏訪山古墳群の出土品
（埋蔵文化財センター）

イ　感想

高坂台地の周辺には越辺川及びその支流もあり、これらの支流を遡上した外来系の技術力がある集団が移入したことにより、稲の増産に寄与するとともに、古墳時代初期の古墳が多く築造されたと推測される。古墳が引込線の敷設工事により北側の半分以上が失われたのは大変残念である。

②諏訪山(35 号)古墳

ア　概要

諏訪山 29 号古墳から約 15mの近距離に所在する前方後円墳で葺石や埴輪を持たない古墳である。

写真-25　諏訪山 35 号古墳への小径

イ　感想

諏訪山古墳群の中で最大規模の前方後円墳で、県内最古の一つといえる。私有地のため発掘調査が行われていないが、現在は灌木で覆われて通路がないため、全体像が見渡せないのが残念である。近接する諏訪山 29 号の出土品を鑑み、35 号の発掘調査ができればと期待している。

写真-26 諏訪山古墳群の出土品
（埋蔵文化財センター）

(4) 市野川流域右岸の古墳

東松山台地東部は都幾川方向に大きく突き出した舌状（ぜつじょう）台地である。この舌状台地の北側に市野川が流れている。約 19 の古墳群で構成され、前方後円墳が 1 基、帆立貝式古墳が 1 基、前方後方墳が 1 基、方墳が 1 基、円墳他約 80 基がある。この中から、埼玉県最古の前方後方墳である根岸稲荷神社古墳、帆立貝式

古墳である、おくま山古墳及び横矧板鋲留短甲が出土した東耕地3号墳の現地調査を行った。

表-8　古墳形状と規模

名称	形状	規模	築造時期
根岸稲荷神社古墳 (古凍29号墳)	前方後方墳	全長25m	4世紀前期
おくま山古墳 (柏崎1号墳)	帆立貝式古墳	全長62m、後円部径40m・高さ7m、前方部幅20m・高さ1.5m	5世紀後期
東耕地3号墳	円墳	直径25m、墳丘径19m、高さ1.6m	5世紀後期

①根岸稲荷神社古墳

ア　概要

東松山台地の最南端に立地する古凍古墳群の一つである。現在は新江川の改修工事により東松山台地と分断されているが、現地で周辺を見渡すとかつては台地とつながっていたことが分かる。改修工事時に穿孔土器が出土した事で古墳であることが分かったといわれている。小型の前方後方墳で県内最古であるが、後方部の先端側と前方部を消失している。

イ　感想

改修工事の影響かは不明であるが古墳の保存状態も良くなかった。古墳の保存活動を行うと共に、県内最古の古墳であることを示す看板を立てて周知する等が必要であると強く感じた。

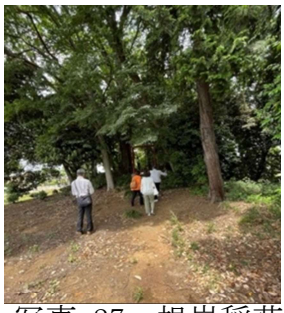


写真-27　根岸稲荷神社古墳入口

写真-28　墳頂への階段

②おくま山古墳

ア　概要

東松山台地が市野川と都幾川に挟まれて大きく東に突き出した舌状台地の北側に築造された柏崎古墳群のほぼ中央に位置する古墳である。柏崎古墳群は古凍古墳群と隣接している。周溝の調査で盾持人埴輪(たてもちびとはにわ)が出土した。

写真-29　おくま山古墳正面

写真-30　出土埴輪(埋蔵文化財センター)

イ　感想

柏崎古墳群周辺は開発が著しく、おくま山の墳頂から周辺を見渡しても古墳を見つけることができなかった。おくま山古墳は周辺に住宅が建っているが、古墳周溝を含めて比較的保存状態が良いと感じた。3 回の調査が行われたが、主体部の調査がされていないので、今後の調査に期待したい。

③東耕地 3 号墳

ア　概要

市野川右岸、東松山台地北縁に位置する円墳で、平成 19 年の土地区画整理事業により見つかった鉄製短甲（「横矧板鋲留短甲（よこはぎいたびょうどめたんこう）」という。）は発掘調査で出土したものとしては県内最初である。

写真-31　東耕地 3 号墳全景

写真-32　鉄製短甲
（埋蔵文化財センター）

イ　感想

古墳は公園として整備する際に一部が削られた。鉄製短甲はヤマト王権が軍事的につながりを持ちたい地方の首長に供給した事から、軍事的に重要な地域としてヤマト王権とつながりがあったことが分かる。短甲の出土は工事中の発見であり、奇跡の発見ではないかと推測する。

(5) 市野川流域左岸の古墳

東松山台地北端、市野川と滑川に挟まれた狭長な岩鼻台地の南縁に築造された岩鼻古墳群で、4 つの古墳群で構成され、27 基の円墳がある。岩鼻古墳群は国道 407 号東松山バイパス工事及び公園整備事業によりほとんどの古墳が消滅した。そこで個々の古墳を調査せず古墳群の発掘調査で出土したものの調査を行った。

①岩鼻古墳群の出土品

ア　概要

岩鼻古墳群は弥生時代後期の岩鼻式土器が出土した遺跡として有名である。1968 年の調査で馬型埴輪と共に「水鳥を冠した人物埴輪」を出土した。また、1965 年の調査で錆に覆われた 17 点以上の破片が出土したが、何かは不明であった。その後 1990 年に最新の技術により蛇行剣（だこうけん）であることが判明した。

写真-33　岩鼻古墳跡

写真-34
水鳥を冠した人物埴輪
(埋蔵文化財センター)

写真-35　蛇行剣
(埋蔵文化財センター)

イ　感想

きらめき市民大学は岩鼻古墳群の中にあり改めて古墳を身近に感じた。また、蛇行剣は交通の要衝に築かれた古墳から出土していることから、古墳時代にこの地域に交通の重要な位置にあったと考える。

7 古墳時代のくらし

(1)概要

古墳の築造には膨大な労働力が必要であった。大仙陵古墳の場合、延べ 674 万人の労働力が必要であったとの試算がある。では、その労働力をどのように確保したのか、労働力となる人間が生活するための住まいやそれを支える生産活動はどうだったのか。我々が注目したのは保渡田古墳群を中心とする「上毛野はにわの里公園」の一画にある「かみつけの里博物館」の展示品である。約 1500 年前の榛名山大噴火により、榛名山東南麓に点在していた古墳、ムラ（住居)、水田等が当時の生活状態のまま大量の火山灰に埋もれたため、出土した埴輪、土器等、及びムラ(集落)や水田の復元模型等は当時(5 世紀)のくらしを知る上で大変参考になった。

写真-36　ムラの復元模型
(かみつけの里博物館)

写真-37　首長の館の復元模型
(かみつけの里博物館)

(2) 古墳時代の出土品

①概要

古墳時代の出土品は、大きく前期・中期・後期でそれぞれ特徴があるので、以下に述べる。

ア　前期（3 世紀後半～4 世紀初め）

円筒形・壺形・朝顔形などの円筒埴輪が出現した。円筒埴輪は古墳の周囲に並べられたり、墓室に納められたりしていた。副葬品では鉄剣・鉄鏃・銅鏡・玉類などが出土している。銅鏡は、裏面に神獣や文様があしらわれている。玉類は、翡翠や水晶などの硬玉で作られた勾玉や管玉など出土している。

イ　中期（4 世紀初め～6 世紀初め）

人物・動物（馬・鳥等）・家屋などの多様な形象埴輪が出現した。金属製の馬具や武器、装身具などの副葬品も出土している。金属製の馬具や武器は、馬を使った戦闘や狩猟を示すもので、装身具は、金属製やガラス製の耳飾りや指輪、勾玉などで身分や地位を表す。なお、令和 5 年 6 月に奈良県で発見された蛇行剣はこの時期のものといわれている。

ウ　後期（6 世紀初め～7 世紀半ば頃）

埴輪の使用が減少し、石製品や土師器（はじき）が多くなる。石製品は石棺や石室や石人像などで、土師器では、壺や皿や甕（かめ）などがある。

②感想

出土品が前期・中期・後期で変化する要因には、中国や朝鮮半島から渡来した技術や渡来人によるものが多いと推測される。特に、鉄は戦いに用いられる武具等だけでなく、農業の用具に使用され、農業の生産性を大きく高めたと考えられる。

写真-38 人物埴輪

(3) ムラ（集落）と住居

①概要

古墳時代のムラは前期から中期にかけては、河川の流域や台地上などの高地に集落が形成されることが多く、後期になると水田の開発が拡大して山間部や河川敷などでも集落が営まれるようになった。ムラを支配する首長と庶民は分れて生活していた。首長は大きな館に住み、庶民は竪穴式住居に住んだ。古墳時代前期の竪穴式住居は床面が方形で四隅に穴を掘り、そこに屋根を支える柱を立て、中央付近に火を焚く炉がある簡単な造りであった。

古墳時代中期の半ば頃になると壁面に煮炊きをするための造り付け「カマド」が作られるようになった。これは従来の炉より熱効率が良く煮炊きや蒸し料理が容易になり台所革命といわれている。住居の平面形には大きな変化はないが、煙を外に出すための煙道が掘られた。

図-3 ムラの風景

写真-39　家の埴輪
（かみつけの里博物館）

写真-40　古墳時代の住居
（科野の里歴史公園）

写真-41 古墳時代の首長の館
（かみつけの里博物館）

写真-42　カマド・貯蔵穴
（中筋遺跡跡の竪穴式住居）

写真-43　カマド
（かみつけの里博物館）

写真-44　カマド・使用風景
（芝山古墳・はにわ博物館）

②感想

首長は前述した三ツ寺Ⅰ遺跡のような巨大な館に住み、住民は竪穴式住居に住み、身分格差がはっきりしていたようである。住民の住居は古墳時代を通してあまり変化がないが、朝鮮半島から渡来した「カマド」の出現は食生活に大きな変化をもたらしたと考える。

(4)農業と食生活

①概要

古墳時代の農業の生産性は弥生時代に比べて高まった。

・稲作の技術の向上。水田の整備や鉄製の農具の導入、肥料や灌漑の工夫など

によって、米の収穫量が増えた。

・雑穀や畑作物の栽培の拡大。米や麦だけでなく、稗、粟、黍(きび)などの雑穀も栽培されるようになった。

また、関東地方の農地は台地や沖積平野に水田を開拓し、水は河川や湧水を利用していた。東松山市の場合、東松山台地と高坂台地の間の沖積平野や市野川流域の沖積平野が該当する。反町遺跡から灌漑工事跡が発見されており、規模の大きい水田があったのではないかと推察される。

古墳時代の食べ物は栽培した米、粟・稗等の穀物や、木の実も食べていたようである。調理はかまどで甕や「こしき」を使って蒸したり焼いたりした。器は土師器と須恵器に分れ、それぞれの特徴を活かし使い分けていた。また、調味料として塩、醤油(醤(ひしお))、味噌等があったようである。

写真-45　小区画の水田模型
（かみつけの里博物館）

写真-46　田植え風景模型
（かみつけの里博物館）

②感想

・水田は地面を平らにする必要があるが、当時の技術では小区画の水田しかできなかったと思われる。また、小区画にすることで水温の管理も容易になり生産性も上がったのではないか。

・我々が当初思っていた以上に豊富な食材や調味料があったようだ。

・野菜や穀物を食べるようになると塩分不足を補う塩は非常に大切なものであり、醤油、味噌等の発酵食品には塩が不可欠である。東松山市を含む北武蔵地域では塩を生産できなかったので、塩を生産した海岸地域(千葉県や茨城県の海岸沿い)から塩を運んだと B 班は推測したが、塩の生産及び運搬に使った製塩土器は出土していないので不明である。また、大量の塩を運ぶ「安定した交通路」を確保するには河川だけでなく、陸路もあったのではないかと思われる。そこで、B 班は陸路に関する議論を行った。その結果、吉見町の公式ウェブサイトによると、東山道武蔵路(とうさんどうむさしみち)は 7 世紀に整備されたとされている。この情報から、古墳時代においても断片的に陸路が存在していた可能性が考えられ、さらに、東山道武蔵路が整備される際には、古墳時代の陸路跡が利用された可能性があると B 班は推測した。

(5)服装

①概要

人物埴輪は権力者や高貴な人の服装を現したもので、庶民の服装は埴輪から直接には分からないが、文献等から男女とも簡素で機能的な服装であったことが一般的な特徴である。

また権力者等の男性の髪は美豆良（みずら）という髪を結い、倭文布（しつぬの）や頸珠（くびたま）、手玉（てだま）、足結（あしゆい）などの装飾品も身に着けていたようだが、庶民の髪については分からなかった。

写真－47　女性埴輪
（かみつけの里博物館）

②感想

文献等から庶民の服装は簡素で実用的であることが重要視されており、日常の労働や活動に適した簡単なカッティングや裁縫が用いられたと推測される。素材としては、動物の毛皮や麻、亜麻などの植物繊維が使われ、多くの庶民が服を自ら手作りしていたと考えられる。そのため、B 班は裁縫スキルや機織りの技術が広く普及していた可能性があるのではないかと推測した。

写真－48　男性埴輪
（さきたま史跡の博物館）

8 まとめ

(1)古墳の巨大なスケールと 1500 年以上前の古代人の苦労と技術力に感銘を受け古墳の重要性と古代人の進化、技術、組織力に感動した。また、古墳時代の人々の農業と技術に感銘を受け、古墳の築造における高度な組織力と協力体制に驚いた。そして、古墳時代の知恵や技術が現代の生活にも影響を与えていることを認識した。

(2)東松山市は、古墳時代の前期から後期までの古墳が全部揃っている国内でも数少ない地域の一つであり、古墳の宝庫とされる。地域に点在する古墳には県内最古の古墳や歴史的に価値ある出土品もみられる。これは市の誇るべき財産である。また、これらの古墳はヤマト王権や日本全体の歴史ともつながっており地域の重要性を示している。

(3)東松山市の古墳を広く知らせ、市民が古墳についてより認識を高めるために、諏訪山古墳群と浅間神社古墳（高坂駅周辺の古墳）を「まなびのみち」の一環として紹介するとともに、小中学校の教材（例えば副読本）に古墳に関する内容を取り入れ、子供たちにその知識を広めることも効果的であると考える。そのためには多くの古墳が私有地にあるため、古墳へのアクセスを改善するため

には、道路整備や滑落防止柵の設置等、環境整備に公的な支援が不可欠であるということに思い至った。

＜写真等の掲載許可等＞

1. 写真　すべての写真は、以下の施設の撮影及び掲載許可を得ている。
   - ・科野の里歴史公園（長野県千曲市役所）
   - ・中筋遺跡跡（群馬県渋川市文化財保護課）
   - ・芝山古墳・はにわ博物館（千葉県芝山町立芝山古墳・はにわ博物館）
   - ・将軍山古墳展示館（さきたま史跡の博物館）
   - ・かみつけの里博物館（群馬県高崎市教育委員会）
2. 図　「図-1 前方後円墳説明図」、「図-3 ムラの風景」、「表-1 代表的な古墳形状」の表及び古墳形状図及び「表-2　古墳形状等の推移」はB班が作成した。
3. 「図-2 実地調査した古墳」で使用した地図は「東松山市の古墳ハイライト」からの使用許可を埋蔵文化財センターより得ている。

＜参考文献＞

- ・塩野博（2004 年）『埼玉の古墳［比企・秩父］』株式会社さきたま出版会
- ・かみつけの里博物館（1999 年）『よみがえる 5 世紀の世界』
- ・埼玉県立さきたま史跡博物館（2021 年）『運ぶ―埼玉古墳群とモノの動き』
- ・埼玉県埋蔵文化財調査事業団（2015 年）『見えてきた‼古墳時代の幕開け-東松山市反町遺跡を中心に-』
- ・城倉正祥編（2018 年）「野本将軍塚古墳と東国の前期古墳」『早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所研究論集；第 1 冊』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所
- ・野澤美穂（2022 年）「古代日本の衣服変遷とその背景」『人文学部学生論文集第 20 号』京都先端科学大学人間文化学会学生論文集編集委員会
- ・譽田亜紀子（2022 年）『知られざる古墳ライフ』誠文堂新光社
- ・白石太一郎（2019 年）『古墳とその時代』山川出版
- ・白石太一郎（2022 年）『東国の古墳と古代史』吉川弘文館
- ・若狭徹（2022 年）『埴輪　古代の証言者たち』KADOKAWA
- ・吉村武彦（2021 年）『新版　古代史の基礎知識』KADOKAWA
- ・東松山市教育委員会(2021 年)『東松山市の古墳ハイライト』
- ・中村倉司（2017 年）「埼玉丸墓山古墳と大里甲山古墳 - 武蔵国造家内紛と大型円墳」『紀要』第 4 号埼玉県立史跡の博物館